【十日町雪掘りキャンプ 2024 を終えて】

新潟教会　長倉望（新潟教会：雪掘りキャンプディレクター）

コロナ期の 3 年間の休止を経て、4 年ぶりに開催された十日町雪掘りキャンプが、多くの人たちのお祈りとお支えの中で、2024 年 2 月 14～18 日の全日程を無事終了しました。十日町雪掘りキャンプは、2004 年の中越沖地震の被災地でもあり、時に雪害ともよばれる豪雪地、十日町で雪掘りボランティア体験をしながら、被災支援について学ぶ、というちょっと変わったキャンプです。今年の参加者は、Zoom でお話くださった講師、スタッフ含め、総勢 31 名。そのうちの 15 名が学生という若い年齢構成のキャンプで、今回初めて参加してくれた人もいれば、「4 年ぶりの雪掘りキャンプにぜひ参加したい」という願いをもって参加してくれたリピーターもいました。

今年は、今までで最も雪が少なく、十日町市で開催される雪まつりの開催もあやぶまれるほどでした。それでも、根雪になっている雪の山を切り崩すなど、やらなければならない作業があるのが豪雪地たるゆえんです。日中は、十日町教会員の方たちのお宅をはじめ、十日町教会駐車場、関連保育園である山本愛泉保育園の園庭、栃尾教会など、いろいろなところで、除雪作業を体験させていただきました。

夜の被災支援学習でお話を聞かせてくださったのは、三浦啓さん(関東教区桐生東部教会)、新井純さん（京都教区世光教会：Zoom)、森分望さん（四国教区三津教会：Zoom)、柴田信也さん（兵庫教区兵庫教会)。その他、大塚勁さん（同志社大学大学院)、伊勢希さん（東京教区千葉支区京葉中部教会)、そして長倉が、朝の礼拝のお話を担当しました。

三浦啓さんは、兵庫教区被災者生活支援長田センターが主催した第一回雪かきツアーから今回にいたるまで、ずっと参加し続けてきた経験から学ばされてきたことについてお話しくださいました。新井純さんは、中越地震で被災した時の話からはじまり、新潟地区被災支援担当としてかかわった数々の地震、そして、キリスト教保育所同盟の理事長として能登半島地震の被災地にある関係施設を問安したときの映像なども映しながら、その経験と思いを分かち合ってくださいました。森分望さんは、残念ながら体調の関係で Zoom での講演となりましたが、東日本大震災でご兄弟の森分和基さんの牧会する宮古教会が被災し、四国教区がそこに派遣してくれた体験、また 2018 年の西日本豪雨水害での被災とその支援。そして、現在三津教会で行っている教会こども食堂とフードバンクでの生活支援を通して、考えさせられていることを丁寧にお伝えくださいました。柴田信也さんは、東日本大震災の被災支援の際、東北教区被災者支援センターエマオで出会った一人一人のエピソードを紹介しながら、わたしたちが考えるべきことを問いかけてくださいました。

また今回、はじめて Zoom を用いましたが、森分望さん、新井純さんが、3 日間を通じて

Zoom で被災支援学習に参加してくれたことにより、はからずも、講師同士のパネルディスカッションのような対話が生まれたことが、被災支援学習をより豊かにしてくれたと感じています。SCF の野田沢さんも、パネラーの一人のように Zoom でご参加くださいました。

今年で 17 回（関東教区主催になって 7 回）を数えたこのキャンプ、今年もまた参加した一人ひとりに、多くの出会いと気づきが与えられた 5 日間だったと思います。講師を務めて下さった森分望さん、柴田信也さん、新井純さん、ありがとうございました。毎年、慣れないボランティアを快く受け入れて下さる十日町教会や幼児園の方々と久保田先生ご家族、手作りの食事を差し入れしてくださった新潟教会有志の皆さんのお支えに感謝します。また、キャンパーを送り出してくださったそれぞれのご家族と、このキャンプを一緒に形作ってくれた参加者・スタッフ一人一人、そして、このキャンプを覚え支えて下さる関東教区のお一人お一人と、何よりすべてを支えて下さった神さまに心から感謝いたします。

【参加者感想抜粋】　*※感想文全文は関東教区 website に掲載予定です。*

★この 4 日間のボランティアを終えて私は多くの経験をすることができました。

雪かきは今までの私にとって大変でただ疲れるだけの時間でした。ですが今回の雪かきは今までとは違いとても充実した時間となりました！雪かきをすることでありがとうと感謝され、とても楽しく気持ちよく笑顔で一日を過ごせました！日頃の運動不足も解消され一石二鳥です。

夜には被災地についてのお話を聞く時間があり、これから自分がボランティアに行く際にためになることを知ることができました。

このボランティアで学んだことは多く、ほんとうに来てよかったと感じてます。たくさんの迷惑をかけてしまいましたが、初めて会った方々といっぱい話し笑って、みんなでご飯の支度や寝る場所の準備をするという貴重な時間は私にとって唯一無二の宝物です。今後、この経験を活かして自分の成長に繋げていきたいと思います。ありがとうございました！

★私は初めてボランティアに参加して、とても良い 4 日間を過ごしました。その理由の 1 つは、雪かきし終わった時に感謝の言葉や笑顔が見れるからです。私は学校に行ったり私の中での普通の日常を送って居たらここまで、感謝されたり優しい笑顔を向けられたりする事は中々無いし凄く疲れて居ても「よし、また頑張ろう」と思うし、人の笑顔をみたら自分まで嬉しくて笑顔になれるからです。この 4 日間で分かった事は、高校生の勉強はとても大切ですが、勉強以外にも大切なものがあるという事です。もし、来年もこの十日町の雪掘りキャンプが開催されるのであれば、またボランティアさせて貰う人達の笑顔見たいと思います。

★部活で鍛えていたから体力的には大丈夫なのではないかと思っていましたが、雪掘りの後はかなり疲れているように感じました。また、須藤さんのお宅の雪掘りをやらせていただいて、須藤さんのスコップやダンプの扱い方が自分達とは全く違って、自分の体の一部かのようにコントロールされていてすごいなと感動しました。来年はもっと研究しながら取り組んでリベンジしてたいです。

★能登半島地震に行かれた新井純先生のお話を聞き、周りで大変な思いをしている人がいたら、私も助けたいと思いました。また、毎日の生活の中で自分にできることをしようと思いました。なので、翌日の雪堀りで、一生懸命雪堀りをすることを意識しました。

２日目の夜の森分望先生のお話を聞き、子ども食堂について知ることができました。そのお話の中で、フードロスについて知りました。私も時々食べ物を残してしまうことがありますが、食べ物を大切にし、残さないことを意識していきたいと思います。また、子ども食堂に１００人くらいの人が集まっていることを知り、そんなに貧しい人が地域に多いのだと思い、驚きました。

キャンプを通して、体が疲れてしまうこともありましたが、出会えた人たちと一緒だったので、辛さよりも楽しいと思うことがたくさんありました。温泉やおいしいご飯、動脈ピース、雪合戦など思い出に残ることがたくさんありました。「十日町雪堀りキャンプ」に参加して本当に良かったです。

★「十日町雪堀りキャンプ」は共同生活で、スマートフォンをあまり触らない生活でした。普段は、学校以外ではずっとスマートフォンを触っていますが、今回、スマートフォンを触らなかったので、人の顔を見て、相手の表情などを見ながら会話をすることができました。今回の共同生活を通して、スマートフォンを使わない友だちとの関係を大切にしたいと思いました。また、初めてお米を炊いたり、包丁の使い方なども周りの人に教えてもらいました。初めてのことがたくさんありましたが、たくさんの人に出会えたり、雪対策について知れたり、みんなと協力することの大切さを学ぶことができました。

★柴田先生のお話の中で「人薬」＝人が人を癒すこれは人にしか出来ないことであり昨今ネットや IT などでは出来ない…確かにそうだと思いました。人には感情がありそれと同時に相手の感情を読み取れる能力が備わっている事に。四日目朝の礼拝の中で伊勢先生が東日本大震災のボランティア活動で、被災された方のご自宅片付けの中で、旦那さんが記念の時に描かれた絵を他の物と一緒にごみのように外に投げ出しているところを、奥様がなんとも言えない感情で見ておられた、ということを涙ぐみながらお話しくださったのが印象でした。

★私がこの雪掘りキャンプに参加したのは 14 年も前です。神学部のラウンジでたまたま会った神学部の先輩から「一緒に行かないか」と声をかけてもらったことがきっかけでした。その時は何も考えずに面白そうという興味本位で参加をし、そのことがきっかけとなって、この時期になると時間を調整しながら、雪があってもなくても可能な限り参加するようになっていきました。

そして、今回も「雪がない」ということがわかっていた中で、雪掘りにいきました。幾人かの人からは「雪がないのに何をしにいくの？」と言われました。しかし、そのように問われる中で、私にとってこのキャンプはなんのためにあるのかということを考えると、誤解を恐れずに言うならば、「雪を掘る」ということが、今の私にとっては 1 番の目的ではないということに気が付きました。

では、なんのためにいくのか。その一番の目的は「雪掘り」というテーマのもと、その場所で生活する方々や、キャンパーたちとの出会い、そして、十日町教会の礼拝堂に掲げられた十字架の前で祈りを共にすることで感じられる喜びがそこにあるからです。

そして、その時間を過ごし帰っていくとき、心の中に不思議と明るい希望のようなものがいつも与えられる。きっとその心の内を照らしてくれる出会いがいつもあるからこそ、「再びあの場所へ」という思いが湧いてくるのだと思います。

★シャベルの使い方ひとつにしても、雪国を知らない自分は素人だったなと思い知りました。それでも今年は小雪だということなので、最後まで情けない思いでいっぱいでした。好奇心だけで参加したつもりはありませんが、ボランティアをするより邪魔になってしまったところが多かったのではないかと思います。参加するための心構えというよりは、天災も人災も、どこかで必ず起こり、またそれは助けを必要とする人々をたえず生み出す、ということへの、日頃からの「気持ちの向け方」みたいなものをどうやったら養うことが出来るのか、帰ってきてから考えています。

★今年、私は初めて餃子の美味しい北京というお店に行くことが叶いましたが、お店の方が毎年訪れる雪堀メンバーのことを覚えていてくださり「お待ちしておりました。いつもありがとうございます。またお待ちしています」と言っておられるのを聞き、1 年に 1 回訪れる人たちを覚えてくださっていることに驚くとともに、雪堀キャンプを長く続けてきたからこその出会いなのだと思いました。先ず、行くこと。現地の方と出会うこと。そしてまた行くこと。そのことがどれほど大切なことかと思わされます。冬に差し掛かると十日町に雪は降っているのかな。十日町の方たちはどうしているかな、と思うようになり、夏になると、十日町の夏はどんなかな。皆さんどうされているのかな、と思います。心のつながりを思います。イエス様が「行って、あなた方も同じようにしなさい」と言ってくださったことが大きな励みとなります。

★「はーい、では全身の力を抜いて。優しく瞼を閉じて。今日ここへ来る前に起こったこと、この後の予定は一度忘れて。奥歯の噛みしめを解いて。眉間のしわも。全ての表情を手放します。」ヨガのレッスンで聞いたこの言葉のおかげで無表情という言葉に親しみを感じるようになった。

ある人の演奏を聞くと、いつも同じ感覚にとらわれる。私の心にある扉みたいなものがパッカーンと開き、ちっちゃな羽を生やした何かが私の体を置き去りにして、パタパタと飛んで行く。まるでからくり仕掛けの鳩時計か何かのようにポーンと飛び出したそれは、好き勝手にそこら中を飛び回る。そして、音楽が止まると、私の体に戻ってくる。また、扉がパタンと閉まる。これは心臓なのか、数分前の私はそれが自分の体の中にあることすら気がついていなかったのに、今や温かさと重さを持って私の真ん中に居座る。私の心は温かくて穏やか。

48 時間に満たない短い滞在時間だったのに、十日町から帰ってきてからも自分の心が温かくて穏やかなことに気がついた。もしかしたら、羽の生えたアイツを好き勝手に飛び回らせてしまったのかもしれない。私は自分の表情に無頓着でいられたし、いつの間にか背負っていた「こうあらねば」を降ろして、 余計なものを手放して、引き出してもらった「こうありたい」に素直でいられた。なぜなら、それを引き出してくれる人たちと一緒に過ごしていたから。だから、ここへ来ると、私はいつもよりもいい人になる。雪堀りキャンプでしかお会いしていない皆さま、普段の私はもっと・・・です。

★夜の被災支援学でいろいろな方々にお話を聞かせていただいて、大きな災害の時だけではなくて、日常生活の中で助けを求めている人がたくさんいるというお話が一番印象に残りました。このボランティア学習キャンプに一丁前に参加しにきた私でしたが、今までの自分は日常生活の中での小さな助けの声に耳を傾けられていたのかと考えさせられました。また、雪掘り一つ、日常生活の行動一つ、なんとなくやるのではなくて、愛をこめて丁寧にやることが大事だと学びました。また、今回雪掘りキャンプに参加して、始めてお会いした方や数十年ぶりに再会した方などなどさまざまな方と出会うことができました。雪掘りキャンプでたくさんの方と繋がることができたこと、ほんとうに感謝です。年代が違う方々と共同生活をしたり、お話をしたりする機会はなかなか少ないのでとてもいい経験になりました。

★最初は軽い気持ちで参加した僕ですがやってるうちに誰かが助けを求めてるから！という気持ちへと変化していきました。このキャンプが開催されたこと、このキャンプに誘ってくれたこと、このキャンプに出会えたこと、凄いどれも感謝ばかりです。

来年も予定が空いてたら来たいです…というか予定を空けて来たいです。この 4 泊 5 日間疲労は凄かったけどその分楽しいこと、美味しいものも沢山でとても充実出来ました。ありがとうございました！

★2020 年のキャンプから 4 年ぶりの開催となった雪掘りキャンプ、久しぶりに頭と体をしっかりと働かせるキャンプとなりました。前回のキャンプは記録的小雪で台風被害のあった小布施まで遠征し、泥掘りをしたことをよく覚えています。

とりわけ、今回は 2 月が多忙で、受験、結婚式を 1 週間後に控えてのキャンプ参加という超タイトスケジュールでした。それでも、なんとか予定を調整して参加したいと思えるキャンプでした。残念ながら、全日参加は出来なかったのですが、それでも、2 泊 3 日、超濃い時間を過ごさせて頂きました。

4 年ぶりの参加となっても「お久しぶりですね」と覚えていてもらい声をかけられたことがとても嬉しかったです。雪掘りキャンプが与えてくれた「絆」があると、深く思わされました。

★被災支援学習にて桐生東部教会牧師三浦啓先生に、2004 年新潟県で発生した新潟県中越地震のお話をして頂き、当時私は 9 歳でしたが、とても記憶に残る出来事でした。そんな中、日本中の日本基督教団の方が十日町に集まりボランティアセンターを設立したのが今の十日町雪掘りワークキャンプの始まりだと聞いて考えさせられました。

また新井純先生の「私たちは微力ではあるが無力ではない」との言葉がとても心に残りました。この言葉を聞いた時にまるで子供の頃に聞いたハチドリのひとしずくのようだなと思いました。二日目の被災支援学習を森分望牧師に行って頂き、子ども食堂の現状語って頂き私は子ども食堂に対してとても無知でした。三日目の被災支援学習、柴田信也先生のお話で「雪掘りは愛だ」想像力は愛だとても感銘を受けました、自分のためではなくまだ知らないこれから出会う人のために行うのだと自分が生きてきた中で誰かのためにと思い率先して何かをしたいとの行動は本当に数少なくとても印象に残った言葉でした。

★雪堀りに加えて掃除や食事の準備等々も共にする中で、中～大学生の皆さんと共に食事の準備をした際には「お米(10 合)を炊く準備をお願いします」と伝えつつも、ふと違和感に気づいて声をかけてみると「え！この 10 のメモリまでお米を入れるんじゃないんですか？」との返答に、思わず「君たちは米を炊いたことがないのかい？」と驚いたこともありましたが、十日町雪堀りキャンプはこのようにプログラム・作業１つ１つを通して単純に雪堀りだけではない様々な気づきや学び、成長や出会いが与えられる豊かな場所・機会の時でもあるのだろうということを実感しました。私自身もそのような教会的な交わりの中で育まれてきたということも思い起こします。幼い頃からこのキャンプに参加する中で進路・道が備えられていったのであろうとの感想もあげられていた通りなのでしょう。

十日町教会の方のお宅の除雪に際しては「チンチンチンしてシャララーンしておいて」との身振り・手振りを交えた指示に「わかりました」と答えつつ、ふと周りを見ると「なんのこっちゃ？」とのキャンパーの姿を前に、雪かきに奮闘してきた日々の中で少しばかりは雪国の生活に馴染んできた(のかもしれない)自分自身を発見することもできました。

★・・・二日目は、班に別れてワークを行いました。午前は岡田さんのお宅の駐車場の雪かきをしました。車一台分の駐車スペースを作って欲しいとのご要望でした。私は最初「一台分なら簡単だ」と思っていたけど実際は思っていた何十倍も大変でした。お昼は岡田さんのお宅でご飯を食べました。午後は教会裏の駐車場の雪かきをしました。教会裏の駐車場の雪は私の身長より高く硬いため大変でした。

★今年は小雪でしたが、大雪が降る十日町の生活を見ていて、「雪堀りがある生活は大変だな」と思う人も多いと思いますが、私は少し違った見方をしています。雪堀りをしないと、隣りの家とのトラブルになることもあると言います。また、雪を流す融雪溝などのルールを守ることも大切です。しかし、大変なことばかりではなく、良いこともあります。雪堀りを行う中で、隣りの家の人や近所の方とお話をする機会が生まれます。協力しないと厳しい冬を越していけないのです。私も十日町に通い、雪堀りを行う中で、十日町教会の近所の方々と交わり、お顔や名前を知ることができました。雪堀りは、目の前に積もる雪を取り除いていく作業ですが、人と人との間にある見えない壁も取り除いていく機会にもなるのです。私たちは“便利”と言われるデジタルな物に囲まれる生活に慣れていっていますが、雪堀りでは、手にスノーダンプやスコップを持って雪に向き合うというアナログな作業です。雪堀りキャンプでも、初めて出会う参加者と一緒に汗を流しながら雪を堀ることでグッと距離が縮まります。今の大人にも若い子たちにもこういう経験ってとても大切だと改めて思いました。

【十日町雪掘りキャンプ会計報告】

収入の部		支出の部	
項　目	金　額	項　目	金　額
宣教部交付金	250,000	講師謝礼・交通費(2 名)	60,020
参加費	124,000	十日町教会感謝献金	10,000
献金	15,220	スタッフ交通費・現地交通費	37,820
		参加者交通費補助	30,000
		保険料	12,660
		食費・日用雑貨等	166,620
		貸布団代	72,100
合　計	389,220	合　計	389,220

皆さまのお祈り、お支えに心から感謝いたします。

「ナタナエルよ、書を捨てよ。町へ出ようではないか」　柴田信也（兵庫教会牧師 雪掘りキャンプ講師）

「『出会う！働く！考える！』の言葉通り、雪と共に暮らす人たちと出会い、被災支援の経験を分かち合い、共に働く仲間たちと過ごす 5 日間。ぜひご参加ください！」と案内文には記されていました。神戸に戻って改めてこの言葉を読み返し、しみじみとその言葉の滋味深さをありがたくも反芻しながら述懐するものです。

これまでのしばらく、「今、息苦しさを感じているのは私だけではない」、「今、慎みをもって暮らすことがみんなのため」と自らに言い聞かせて過ごしてきました。そんな中で、いつまでかを考えるのをやめて、一日一日を積み重ねることにこころを傾けてきました。それが、社会のため、誰かための貢献。今できることは、終息に向けて協力することであるとして、これまでの生活のイメージを変えてきました。そして今回、4 年ぶりの再開となった十日町雪堀キャンプに参加するため新潟へと向かいました。

2004 年 10 月 23 日に新潟中越地震が発生し、豪雪に見舞われた翌年 05 年 2 月に「被災地生活体験雪かきツアー」が兵庫教区被災者生活支援・長田センター主催で行われました。堅牢な雪国の建物も地震で傾ぎ、さらに雪が積もりに積もると倒壊の危険は言うまでもありません。当然とはいえ、兵庫県南部大地震被災地とは異なる災害がもたらす被災の実相、被災者の生活や異なる価値観、その文化に触れ、理解するための活動として始められました。ですが、雪の何たるかも知らずに暮らす関西の学生を中心とした素人集団を十日町教会、関東教区新潟地区の方々は迎え入れてくださったのでした。当時、学生であった方もあれから 19 年、今や「雪堀キャンプ」を引き継ぎ、スタッフとして十日町で迎えてくださったことに感慨を深くするものでした。この間にも新潟地区教会・伝道所でも人事異動がありながらも、活動を受け止め「雪堀キャンプ」を引き受け、全面的に協力くださったことは感謝にたえません。これまで参加者も尽きることなく、さらに関東教区として茨城、栃木、群馬からも参加者を得て教区的な活動へと広がるまでになったことに、この「雪堀キャンプ」の意義の深さに驚きを噛みしめるものです。

一方で、毎年の開催が断たれた空白期を経て、情報提供や勧誘、引継ぎの機会を失ったことから、再開後も参加者は限定的なものとなるのは止む無しと思っていました。今回、集ったのは 32 名。その中には以前の参加は小学生の時、今や青年となって十日町教会に戻ってきたのでした。再会を喜ぶ以上に、その成長に目を丸くしたり細めたり、その驚きは隠し切れず、大いに心揺さぶられるものでした。再開したとはいえ、雪はわたしを歓迎してはくれませんでした。例年にない小雪。これを喜ぶのは早計で、雪ないと仕事がない、除雪の仕事が回ってこないことで生計を苦しくている方たちもいます。それでも何とか、宛がってくださった雪堀のワークに精を出し、スコップを振るうのでした。言い換えればそれは、ボランティアと言う言葉では収まらない、自分との格闘でもあります。不慣れでも、不器用でも、自信はなくても、それでも同じ十日町の雪に向かって行く。初めて出会った、性別や世代は異なっているもの同士が目の前の雪に挑むのです。しかし、その互いの姿はわたしを大いに励まし、奮い立たせるものでした。無心にスコップを振るう、無私の姿に感動さえ覚えるのです。そしてその感動は、わたしが渇望していたものであったと気づかせてくれました。と同時に 4 年もの間、一堂に集い、声を交わし、手を取り、汗を流し、共に働き、共に考える、その人と人とが連なり生きる、当たり前の日常を手放しそうになってしまっていたことに慄きを覚えたのです。

「ボランティア元年」と呼ばれるほどに、兵庫県南部大地震被災地へと駆け付けた人々がいました。その姿は「3.11」の被災地にもありました。そこに、原発事故の情報など行政の指示は信用が出来ないという雰囲気があったことも言われますが、翻って、1 月 1 日の「能登半島地震」では、その全く逆であったと言われています。そこには、他人の判断や行動を信用できないといった不信感や、行政の判断には従わないといけないという妄信がコロナ禍で巷を駆け巡り、「コロナ自粛論」が「ボランティア自粛論」に拍車をかける結果となったことから、被災地・被災者支援への関心が減じるものとなって、復旧・復興へのスピード感が削がれているとさえ言われています。時代は移ろい、被災地の状況をリアルタイムで見ることのできるSNSは多くの人に当事者性を感じさせた一方、被災者を置き去りにした「ボランティア自粛論・迷惑論」もが蔓延する結果をもたらしたのです。まさに、インターネットが現実の遠近感を狂わせてしまった、異様な光景を映し出したのでしょうか。

「各瞬間ごとに 類いなき新しさを 摑つかみ給え」と20世紀のフランスの文筆家、アンドレ・ジッドはわたしを誘うのです。「旅をせよ」とはさしづめ、「自然に触れよ」ということ。現代なら「スマホを手放して外界のリアルを頬張り飲み干せ」となるのでしょうか。それはわたしの失われた感覚を取り戻していく旅となるに違いないと確信します。つまり、経験して自分の身体で感じることなのでしょう。迷ったら、家から外に出てみよう。きっと成長は「出会い」の中にあるものなのだから。